

八月十一日は、昨年より「山の日」として国民の休日となりました。「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ことを趣旨とした日、この時期に山に登る方も多いことと思います。

日本人は古来より、山を信仰の対象としてきました。山を神として崇めるさまざまな山岳信仰があり、伝来した仏教と結びついて修験道などの山岳仏教も生まれました。

さて、曹洞宗の高祖道元禪師は、今の中国当時の宋の国から戻られた後、京都の深草に興聖寺を開かれて坐禅修行を始めます。多くの弟子が集まるようになりますが、さまざまな圧力も加わるようになりました。そんな中、宋で師事した如浄禪師の……、

「国王大臣に近づかず、深山幽谷にて仏の道を行じ、仏の弟子を育てなさい」という教えを守り、道元禪師に帰依をしていた現在の福井県、越前志比庄の地頭、波多野義重公のすすめで、越前の山中に傘松峰大仏寺を建立します。この寺はのちに吉祥山永平寺と改められました。

こうして山深い永平寺での修行生活が始まるのですが、その中で道元禪師は、山での修行生活をテーマとした歌をいくつか詠んでいます。

山ずみの友とはならじ 峯の月 かれも浮世をめぐる身なれば

美しい峯にかかる月は、山に住む者の友にはならない。

山で修行生活を続ける中で、峯の月を愛でてでも、それを友にしたいとか、ましてや我が物にしたいというような事は詠まないという厳しさを感じる歌です。

また、このような歌も詠んでいます。

峯の色 溪の響きも 皆ながら 吾が釈迦牟尼の 声と姿と

四季折々に移り変わる山の色も谷川の響きも、すべてそのままお釈迦さまの声と聞き、そのお姿を拝するようで有り難い……。

まさに「山の恩恵」ともいうべきでしょうか。

深山幽谷の永平寺での修行は、今現在も綿々と続いています。